

第27回日本SPF豚研究会 講演要旨

(於 平成29年8月5日 学士会館)

1. 「SPF豚の歴史と今後の協会の方向性」

日本SPF豚協会 北島 克好

2019年4月、日本SPF協会は設立50周年を迎えます。半世紀の長きにわたり、設立主旨にある「日本のSPF養豚産業発展に期する組織」を実現するため、民間主導で幾多の困難を乗り越え、途絶えることなくバトンをつなぎ事業推進を行ってきました。大きな節目を前に、日本のSPF養豚、協会について歴史を振り返り、今後の協会の進むべき方向性について考えてみたいと思います。

2. 「日本SPF豚協会年次報告 平成28年度(2016)」

日本SPF豚協会 藤田 世秀

平成29年3月末現在のSPF豚認定農場数は178農場(内GGP・GP農場18、一貫生産・繁殖専門農場125、子豚育成専門農場2、肥育専門農場33)であった。認定農場数は昨年と同じであったが、飼養母豚数は79,409頭と1,009頭(1.3%)減少した。

生産成績をみると、一貫生産農場においては、農場飼料要求率、農場回転数は横這いだったが、1母豚当り年間肉豚出荷頭数は増加した。また、A分類薬品費も増加した。繁殖専門農場(繁殖-II)では、1母豚当り年間離乳頭数および年間出荷子豚頭数は増加した。出荷子豚1頭当りA分類薬品費は減少した。分娩回数も横這いだった。肥育専門農場(肥育-II)では、飼料要求率、肉豚出荷率は横這いだったが、A分類薬品費は大幅に増加した。

3. 「SPF豚認定農場における医薬品の使用状況について」

名越 仁宣

SPF豚認定CM農場では、特定疾病が不在またはコントロールされているためコンベンショナルCM農場よりも、薬品費が少ないと思われる。今回、昨年6月から本年3月までの4回の認定委員会において認定されたCM一貫生産農場およびマルチプルサイト農場での抗菌性物質、ワクチンおよびホルモン等の使用状況をカテゴリー別に、また金額ベースで調査したので報告する。

4. 「ワンヘルスと薬剤耐性」

岐阜大学大学院連合獣医学研究科 浅井 鉄夫

抗菌性物質は、医薬品、動物薬、農薬などの人や動物の健康と、畜産物や農産物の安定生産のために利用されている。しかし、医療や獣医療で薬剤耐性菌が抗菌性物質による治療効果に影響するという問題を引き起こし大きな問題として取り上げられるようになった。薬剤耐性菌は日常生活からも環境へ放出され、自然環境における耐性菌汚染は進んでいる。また、交通網の発達によって耐性菌の伝播は速やかで広範囲にわたるようになった。2015年5月の世界保健総会で、薬剤耐性に関するグローバル・アクション・プランが採択され、わが国においても2016年に薬剤耐性に関する国家行動計画が策定された。これにより、薬剤耐性菌の対策は分野を超えたOne healthの視点で取り組まれつつある。

5. 「薬剤耐性(AMR)対策における飼養衛生管理の関わりについて」

農林水産省消費・安全局畜産安全管理課 関谷 辰朗

薬剤耐性対策については、昨年4月に我が国のアクションプランが決定されました。国際的には、G7の新潟農業大臣会合、伊勢志摩サミット、さらには国連総会ハイレベル会合で議論されるなど、薬剤耐性問題は国際社会の最重要課題となっています。

抗菌剤は、家畜の健康を守り、安全な畜産物の安定生産を確保する上で必要な資材ですが、その使用により増加する薬剤耐性菌が人医療や獣医療に影響を与えるリスクも存在します。

そのリスクを低減するための効果的な対策を考える上で、極めて基礎的かつ重要と考えられるのが、飼養衛生管理です。世界保健機関(WHO)が策定した薬剤耐性対策に関するグローバル・アクションプランでも、我が国のアクションプランでも、対策の大きな柱として「感染予防・管理」を位置付けています。

これは、飼養衛生管理水準を向上させ、動物の健康状態を良好に維持することが、感染症の発生を予防し、安全な畜産物の生産を確保するとともに、抗菌剤の使用機会の低減、その結果としての薬剤耐性対策につながるということです。我が国の抗菌剤の慎重使用のガイドラインでも、飼養衛生管理の徹底やワクチンによる感染症の予防を、抗菌剤の慎重使用の考え方の基礎となる重要な要素として位置付けています。

本講演では、薬剤耐性対策と飼養衛生管理について考えたいと思います。